
成仏屋、氷室耕一。

MCおもむろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

成仏屋、氷室耕一。

【Nコード】

N5734A

【作者名】

MCおもむろ

【あらすじ】

名前、氷室耕一。職業、成仏させることが職務の“成仏屋”。またの名を“逝かせ屋”。でもこれはカタカナで書いてはいけない。え？なぜかって？もう、わかってるく・せ・に！

人生のエピローグから、プロローグは始まる。(前書き)

大部分がシリアスです。しかし、続編(ぶっちゃけ続編が本編)はギャグにしようと思ってるので、コメディーに入れました。

人生のエピローグから、プロローグは始まる。

私の名前は、本田絵里。

私は今、宙に浮いている。

言っとくけど、幻覚を見ているわけでも、ましてや、私が超能力者なわけでもない。

視界を下におろす。

そこには、私がみるも無残な姿で横たわっていた。

頭からは血が大量に噴き出し、腕や足は不自然な方向に向いている。着ている服は、元から赤い色なのかと見間違っう程だ。

私はトラックに引かれてしまったらしい。

トラックの運転手は慌てて私に駆け寄る。

「おい！だっ、大丈夫か！！」

大丈夫じゃないって。

魂抜けてるって。

「き、救急車！救急車だ！！」

無駄だと思うけどな…。

私は、下の慌ただしい喧騒をボーツと見ていた。

今日は用事があった。

私の片思い、クラスメイトの小坂君と映画をみる予定だった。デートにこじつけるまで、相当努力した。

話をするだけでも緊張するのに、デートに誘ったのだ。緊張どころの騒ぎじゃない。

この日のために髪型変えて、服も新調して、メイクもカンペキになしたのに……。

髪の毛は血だらけ。

服もタイヤに巻き込まれて、もはやパンク系だ。メイクも青い顔には意味をなさない。

もうどうでもいいや……。死んじゃったんだし。

でも、なんで成仏できないんだろ。この世に未練なんてないのに。

……いや、あるか……。

小坂君に告白できなかった。小坂君と付き合いなかった。

たぶん、私は死んでもこの世にいるだろう。

小坂君にくっついて、いつまでも未練たらたらでいるのだろう。

一生、この思いを告げられずに。

……フ……それも詩的でいいじゃない。

「よかないよ。」

背後からの声に驚き、振り返る。

そこには、一人の男が立っていた。

その男は、精悍な顔立ちなのに、どこかやる気の無さそうな印象を受ける。

「だ…誰…？」

「俺か？俺は氷室耕一。成仏屋だ。」

男は、優しく微笑んだ。

そこから、終わりだと思っていた私のストーリーは、始まりを告げた。

『前代未聞の食い物だぜ！知りてえか！？その名もハンペンだ！』略して前編

翌日、学校の屋上。

フェンスの上に腕を組み、顎を乗せ、校門を見つめる。

私はある人を見ようとしていた。私の日課。これは、魂になっても変わらない。

「なあなあ、何やってんの？」

隣の氷室耕一とかいう男が話し掛ける。

この人はずっと私にくっついてきている。

私は一瞥する。

「……あなたには関係ないでしょ。」

「つれないねえ。」

「というか、なんであなたは私についてくるの？」

「貴女の事が、好きだから……。」

「……………」

「……こほん。昨日も言っただろ？俺は成仏屋。アンタを成仏させにきたんだ。」

そう、この男は私を成仏させにきた。

あの世には、そういう職業が存在するらしい。

魂は生まれ変わる。

死んだら次の命へ、その命が尽きたらまた次へ。だけど、私みたいなこの世に未練がある人は生まれ変われないらしい。

その命の循環を円滑にするために、成仏屋が存在する。と言う事だ。成仏屋はこの世への未練を取り除くまで、ずっとくっついてくるみたい。

「氷室さん、私は成仏屋なんて必要ないです。」

「まーまー、いたら便利だぜ？一時的だけど、魂をこの世に実物化させる事だつてできんだ。」

「いらない。私は成仏する気なんてないですから。どっかに行ってください。」

「嫌！私、あなたについていくつて決めたんだから！」

「……………」

「ま…まあ、これも職務なんだ。俺のことは気にすんな。気体だと思え。スモッグガスだと思え。」

ずいぶんと有害な気体だね。

氷室さんは座り込んで、煙草に火をつけた。

私は、視線を校門に戻す。校門には登校中の生徒。その中に、目当ての人物が現れた。

そう、その人物は小坂君。私は朝早く学校に来て、登校中の彼をいつも屋上で見るのが日課だった。

勉強や部活動、いや、すべてに興味が湧かなかった私が初めて興味をもった人。

私は、勉強は努力しなくてもそこそこできたし、運動も得意だった。外見も、すごい綺麗とまではいかないけど、それなりに整っている。

すべてが中の上。だから、何にも興味が湧かなかった。

そんな時、小坂君に出会った。

小坂君は、いつも何かに一生懸命になっている。

勉強や部活動、趣味の釣りも、すべてに全力で取り掛かる。

一度、友達とみんなで釣りに行って、小坂君は「シャアア！！魚来いやあ！！」

とか言いながら、静かに釣り糸を垂らしてたな。

そんな姿に、私は次第にひかれていった。

でも、この思いも、二度と届かないのだろう。

「…小坂君…。」

この声だって、届かない。

「ふーん、片思いの彼ねえ……それが原因か。」

私は思わず、飛び上がってしまった。

「なっ……！なんでそれを……！」

「成仏屋は読心術もできるのだよ。」

氷室さんはフフン、と鼻をならす。

「……………テー……」

「え？何？今日のうんこは一段とかてえ？」

「サイテーって言ったの！このバカ！」

バチーン！

氷室さんの頬を思いっきり平手で叩く。

「やべえ目覚めそう。」

「変態！」

私はそう言い捨て、視線を戻す。

小坂君は、すでに建物の中に入ってしまったようだ。

「……ハア……………」

「ずっとそうやってんのか？」

私は氷室さんを見る。

氷室さんはあぐらをかきながらフェンスによりかかり、手を頭の後

ろで組んでいた。

「ずっとそうやって、遠目から見つめて。アンタはそれで満足なのか？」

私は氷室さんの隣に座り、膝を抱える。

「そりゃ…告白とかしたいけど……。」

「じゃ、すりゃいいじゃねーか。」

「したいけど！」

私は頬を膝に乗せる。

「したいけど……できないよ……。私、死んでるんだもん……。告白しても意味ないよ。」

「いや、そいつはどうか。」

「え……？」

「いや…まあ、死んでも死んでなくても思いをぶつけるのに意味なんていらねーだろ。大切なのは心だよ。」

「でも、それが小坂君の重荷になったら……？」

「カー！男つつーのは、重荷を背負ってなんぼなんだよ。それに、そういうのを重荷だっと思う奴なのか？」

「小坂君はそんな人じゃないよ！」

「だったら、告白しなさいよ。」

この人は、そんなに私を成仏させたいのか…。

私は、少し軽蔑しながら氷室さんを見た。

だけど、氷室さんの目は真っすぐだった。

この人は、損得勘定なんてしてないんだろう。ただ心から、私の未練をなくそうとしているのだろう。

そう思わせる目は、少し小坂君に似ていた。

氷室さんが、私に笑いかける。

「小坂君って奴も、自分を思ってるせいで成仏できないなんて知ったら、そっちの方がいい思いしねーって。それに、」

氷室さんは、私の頭にポンツと手を置いた。

「こんなかわいこちゃんに好かれるのに、悪い思いなんてしないよ。」

「……告白……してみようかな……。」

「おお！決まりだな！よし、そうとなりゃあ俺も手伝っぜ！」

「……フフ。」

「ん？どーした？」

「なんか、氷室さんって、お兄さんみたい。」

「……お兄さんじゃなくて、お兄ちゃんって言うて？」

「……？……お兄ちゃん。」

氷室さんは頭を抱え、地面を転がり、悶絶していた。……大丈夫かな……。

「……ハアハア……じゃあ今度はお兄ちゃん大好きって……
「言いません。」

氷室さんは膝と手を地面について、ものすごく落胆していた。
……大丈夫かな……。

『後悔は一回もしたことないね！えっへん！……ごめん、うそ……』略して後悔

夕方。部活動も終わり、生徒達が次々と学校を後にしていく。

しかし、体育館には生徒が一人、まだ部活動が続けていた。

部活の顧問がその生徒に話し掛ける。

「小坂ー、おまえはまた居残りか。」

「はい。まだシュートの詰めが甘いんで。」

「どうせ明日も朝早く来るんだろ。鍵はまた預けとくから、遅くならないようにな。」

「はい！ありがとうございます！」

顧問は、だるそうに手を上げると、体育館を出ていった。

「優しいんだか、関心がないんだか……。」

小坂はそういうと、バスケットゴールに向き直る。

小坂の立っている場所は、3ポイントのエリアだ。

小坂はボールを何回かバウンドさせ、小さく息をはくと、ボールを頭の上に構えた。

足を軽く曲げ、上半身を少し反る。その反動で高く飛び、その瞬間、右手に正確な力を入れ、ボールを飛ばす。ボールは弧を描き、バス

ケットゴールに吸い込まれていった。

。

パシユッ

ボールが枠に当たらずに入った時の独特の音が、体育館に響く。

小坂君は軽くガッツポーズをする。

「おお、中々やるじゃない。」

「でしょ？すごいんだから。」

私達は、体育館の少し開いてる扉から、覗き込んでいた。

「……てかさ…俺等はいっには見えないんだからさ。」

「わかってるけど…なんか恐いのよ。」

「……てかさ…君はいつになったら告白するのかな？」

「わかってるけど……」

私は、あの後から、ずっと告白するチャンスを伺っていた。

だけど、いざそのチャンスが来ても、中々踏ん切りがつかない。

ずっと片思いだった人に、“あなたの事が好きです”なんて、簡単

に言えるわけがない。

「もう、「テメーが好きなんだよバカヤロー」って言うだけじゃねーか。」

「なんでそんなにケンカ腰！？氷室さんって、告白したことないでしょ！」

「バ、バカヤロー！俺は“コクリ屋こーちゃん”って呼ばれたんだぞ！」

「じゃあ、どんな風に告白するの？」

氷室さんはしばらく考えた後、私を仰向けに寝かせ、そして抱き抱えた。

「たすけてください！！！」

「パクリじゃん！しかも好きだって伝わってないよ！？助けを求めている事しか伝わらないよ！？」

「じゃあアンタはどうなんだよ！」

「わ…私だって“国利屋えりちゃん”って呼ばれる程ですよ！？」

「字が違うぞ！？なんか政治家にしか聞こえないんだけど！」

私は、氷室さんを仰向けに寝かせ、抱き抱えた。

「国民の税金、私がつかってます！！！」

「自分の悪業告白しちゃったよ！！てか俺を寝かせた意味あったの！？」

「人が動くのに理由はいらない。そう教えてくれたのはあなたですよ？」

「なんかそれらしいこと言ってるけど結局意味ねーんじゃない！」

私達は、我に返った。

そつだ…こんな事してる場合じゃないよ……。

「ほら、早く行ってこい。」

「で…でも…」

「でもは無し！ほら！」

氷室さんはそう言うと、私の背中を押して、体育館の中に入れた。

氷室さんが指をパチンツと鳴らすと、私の体が一瞬光に包まれた。たぶん、これで小坂君に私の姿が見えるようになったんだろう。

ええい、もう行くしかない！

私は決意を固め、小坂君に歩み寄る。

小坂君は、私の気配に気付き、振り返る。

「……おお！本田！昨日はどうした？具合でも悪かったのか？」

たぶん小坂君は、私がもう死んでいる事を知らないんだろう。
まあ、昨日の今日だし、両親はまだ学校に伝えてないのかな。

「はなし、あるんだ。」

「ん？どうした？なんでも聞くぜ？」

小坂君は、ボールを放って、私に笑いかけた。

「あのね、私、死んじゃった。」

私は、努めて明るく言う。

「え？どういう事？」

「見てて。」

私は、氷室さんに目線で合図を送る。
氷室さんは、指をパチンツと鳴らす。
すると、私の足が、見事に消えた。

「なっ……！？」

小坂君は、状況を飲み込めないみたいだ。

私の足があるはずの所を、手で探っている。

「信じたかな？」

「…信じたかなって…なんで…」

「昨日、映画館に向かっている途中にトラックにひかれて。」

「そんな…嘘だろ……」

「それで、最後にお別れを言いに来たんだ。」

「最後……？だって…俺は……」

小坂君が俯き、手を強く握り締める。

「俺……おまえの事が好きなのに……」

私は思わず、口に手を当てた。

小坂君が…私を……？

「なによ…もつと早く言つてよ……」

「ホントだな……せめて…本田が死ぬ前に……クッ……」

小坂君は、手で目頭を押さえる。

小坂君の目からは、涙が溢れていた。

「泣いちゃ…ダメだよ……私…成仏できないじゃんっ……」

「そっいつ本田も泣いてるぜ？」

小坂君はそう言うと、私の涙を拭って、少し笑った。

ああ…この笑顔は、もう二度と見れないんだ…。

その時、私の体が光りだした。

体は少しずつ、小さな光になって消えていく。

私は嗚咽を我慢しながら、最後になるだろう言葉を伝える。

「私ね…ずっと前から……」

そう、ずっと。もういつからかわかんないくらいずっと前から。

「小坂君の…事…」

好きなんだ……いや……

「好きだったんだ…。」

小坂君は、笑って答える。

「はい、俺も…君の事が、好き…でした……」

意識がだんだん薄れていく。

「小坂君、後ろ向いて……。」

小坂君は不思議がりながらも、後ろを向いた。

私は、小坂君に近づいて、抱き締めた。

「恥ずかしいから……」

「ハハッ！なんだよそれ。」

私のまわりの光が一層強くなる。

「小坂君……」

「ん？」

「今……笑ってる……？」

「……ああ……笑ってるよ……」

「小坂君はいつでも笑っていてね……。」

「……ああ……わかったよ……」

「私の事、未練たらたらでいないでよ！じゃないと、化けて出てやるから。」

「はは、わかった。」

「………でも。」

「ん？」

「たまに……たまにでいいから……私の事思い出して？」

「ああ、たまにな。」

小坂君はいたずらっぽく笑う。

私の視界が、完全に光だけになった。

小坂君を抱き締める力も弱くなっていく。

「……ごめんね……」

「ごめんじゃないだろ……？」

「……そうだね……ありがとう……」

好きでいてくれてよかった。

「ああ。」

「ありがとう……小坂君……」

好きになれてよかった。

あなたに出会えて

本当によかった……。

。

光は上り、そして完全に消え去った。

体育館の中には、小坂しかない。

「……なあ……」

小坂は空虚に問い掛ける。

「“好き”じゃ……ダメなのかな……“好きだった”じゃなきゃ……ダメなのかな……」

もう、自分を抱き締めてくれる感覚はなくなっていた。

「今だけ……ちょっとだけ、泣いてもいいかな……？」

彼に答えてくれる者は、誰もいなかった。

「……うつ……うああ……ウアアアアー!!」

小坂は振り返らずに上を見上げ、いつまでも泣き続けた。

『後悔は一回もしたことないね！えっへん！……！ごめん、うそ……』略して後悔

サブタイトルに無理がある

『エピソードタイトルに無理がありすぎるローグ』略してエピソード

冴えない意識の中、重たいまぶたを開く。

私は仰向けになっていた。動こうとするが、体が思うように動かない。

「絵里！目を覚ましたのね！」

近くで、母親の明るい声が聞こえる。

「お母さん…私…一体……」

「あなた、トラックに跳ねられて重傷だったのよ！？2日間生死をさまよっていたの！もう、心配ばかりかけて……」

母親が、ハンカチで涙を拭う。

トラックに跳ねられた…？ああ、記憶がよみがえってきた。

私は、小坂君と待ち合わせしてた映画館に向かう途中に、トラックに跳ねられたんだ。

それで、跳ねられた後、誰かに会ったような…。

ん？でも、跳ねられた後に会っておかしいな…。

よく思い出せない……。

その時、病室の扉が勢い良く開いた。

「本田！」

こ、小坂君！？

な…なんで小坂君が…！

「よかった…！マジでよかった！」

小坂君は涙を流しながら、私を強く抱き締めた。

「え…なっ……！」

私の顔がどんどん熱くなっていく。

「“だった”じゃなくていいんだな！？現在進行形でいいんだな！？」

「なっ！小坂君どうしたの！？よくわかんないよ！」

「…？…覚えてないのか……？」

。

一週間後。

病院の一室。

小坂君の話は、にわかには信じられなかった。

だって私が死ぬって言って、足がなくなって、告白して…。

でも…小坂君が好きなことは、誰にも言っていないし。悟られるよう

な事もしていないし……。

結局、それがきっかけで、私達は付き合うことになった。

ケガは、頭に異常はなかったけど、折れた腕と足で当分入院が続きそうだ。

でも、小坂君は毎日お見舞いに来てくれるし……。
言うことはなし！

ガチャッ

ほら！さっそく……

「おいーっす！」

……違った……誰かな？

「……どなたですか……？」

「君の心の中のお兄ちゃんさ。」

男の人は、真剣な口振りで喋る。

言ってる事がよくわからないけど……。

男の人は、私の頭に手を乗せて、優しく微笑んだ。

「ま、元気ならいいんだ。じゃな。」

男の人はそう言うと、背を向けてドアの方へ歩きだす。

「…まって！」

男の人は、ドアノブを掴みながら止まる。

「私…あなたにお礼を言わなくちゃいけないような……。」

「お礼なんかいらねえよ。俺は成仏屋っていう職務を全うしたまでだ。」

男の人はそう言うと、手を上げながら去っていった。

私は閉まるドアをみつめながら、つぶやく。

「…ありがとう……成仏屋さん……。」

。

「う…ひつく…うう…」

人込みの中、一人の少女が泣いている。

少女には誰も気付かない。

一人のサラリーマンが、走ってくる。

サラリーマンは、少女に気付く素振りは全くない。

そしてそのまま、サラリーマンと少女がぶつかった。しかし、サラリーマンは少女を通り抜け、何事もなかったように走り去ってゆく。

「…ひつく…誰か…」

「どうした、嬢ちゃん！お困りのようだね？」

ふいに聞こえた背後からの声に、少女は振り向く。

そこには、一人の男が立っていた。

その男は、精悍な顔立ちなのに、どこかやる気の無さそうな印象を受ける。

「……誰…？」

「俺か？俺は氷室耕一。成仏屋だ。」

男は、少女に優しく微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5734a/>

成仏屋、氷室耕一。

2010年10月28日04時34分発行